

## 講演 「いのちはぐくむ農と食」

全国地産地消推進協議会 会長(東京農業大学 名誉教授) 小泉 武夫



地産地消の推進が日本の将来を発展させると、私は思う。

食べものは命の綱。自分で食べるものは自分でつくるということは、昔から当たり前に行われてきたことで、他国の民族でも同じことである。

しかし日本はいま、農水産の力が弱くなり、外国に食料を委ねている状況で、そういう現実が日増しに強くなってきている。今後のTPPの動きによっては、さらに大変な状況になるのではないかと予想されている。

富国農民とは、農家が強ければ、農業が強ければ、その国は豊かであるということ。その考え方でいくと、日本は貧しい国である。日本の食料自給率は39%。ボーダーラインを越していると思う。日本に生きている我々が、次の世代に襁を渡すためには、食料自給率、地産地消率を高めて行かなければならない。いつまでも外国から食料が来るかどうかかわからない。もっと真剣に議論しなければならない。

東南アジアのある国など、他国には食料を出さないと言うところも出てきているし、日本に食料を供給しているオーストラリアやカナダなどの国々が、異常気象などが原因で、自国の自給率が下がってきているのが現状。また、今までは考えられなかったBSEや鳥インフルエンザなども起こっている。このような状況が今後、日本にどのような影響を与えるのかと考えると不安である。

日本の専業農家の就農年齢は68歳。世界でも高い部類に入る。今の日本は、68歳に食料を頼っているという現状。全国の田んぼや畑の耕作地の放置面積も、39万8千ヘクタール。今はもっと増えているかもしれない。

このように日本の食料は本当に厳しい状況。今日、表彰された皆さんの活動こそが、この国を助けていくのではないか。こういう取り組みこそ予算化をして欲しい。予算化を行い、国全体で地産地消を進めていく環境も重要だと思う。

自分たちで作るものが一番安全で安心。外国に食料を頼って、食料の安心安全はどうなるか。水産物について言えば、かつて日本の三大漁港は、釧路(北海道)、八戸(青森)、境港(鳥取)だったが、今、一番水産物が集まるのは、成田空港。以前の日本は、自分たちで魚を捕って、食べて、外国に売るほど、水産事業率が高かった。

イギリスは、今から40年前は自給率40%だったが、現在は80%を超えている。イギリスは、州の単位で農産振興を行っている。州が、生産者にそれぞれ農産物の生産を割り当て、出来たものは、その州が買い取る仕組み。だから生産者は安心して生産する。買い取った農産物は、学校給食に収めて、そして、周りの食品産業に販売する。自分たちで作ったものを、自分たちの州で食べるから、自給率は100%になる。やれば出来

るという見本がある。

日本の就農年齢が**68歳**ということは、物理的に見ても長くは続かない。若い人を田舎に送り込むにはどうすればいいか。私の思案ではあるが、**16歳～25歳**の間に農山漁村に行く機会をつくる。大学生の場合は、大学の授業はノートパソコンで**1週間に1回**レポート出し、農閑期になったら学校に戻って勉強する。強制ではなく、カリキュラムの一環にする。農山漁村に行った学生の生活費、交通費等は、全て国が負担する。若いサラリーマンが行けば、その給料や生活費を負担する。この条件で全国**500**の市町村に**50**人ずつ若い人が行ったと試算すれば、年間**570**億円。お祭りをやってもお神輿を担ぐ人がいない、商店街はシャッター通り、そんな地域に都市部から若い人が**50**人行って、地元の若い人と一緒に動いたらいい。そうすれば、各地に若い力や若い情熱が生まれて、日本が地方から蘇るかもしれない。

私はいくつかの大学で客員教授をしている。講義を受けている学生たちに、高齢の方々に食料を頼るのではなく、自分たちの食べ物は自分で作ろう、ましてや将来、子供を産んで育てていくなら、今から自分の食べるものは自分で作る気持ちを持たなくてはダメだという話をした後に、行く気があるかと尋ねると、**8割**の学生は手をあげる。

農家に若者が行かないというのは、マスメディアが作ったこと。大分県の大山町では、農家が6次産業化の取組を行うということで、自分の作った最高の小麦で世界一のビスケットやクッキーを作りたい人を**3名**募集したところ、**80～90名**の応募があった。また、北海道中標津町でも、ある牧場が世界一のチーズづくりに挑戦するから牧場で働かないかと**3名**の募集を行ったら、全国から**140名**の応募があった。若い人が農山漁村に来ないというのは間違い。やりたいことや条件さえあれば、人は来てくれる。さっきの小泉思案については、実際にやってみたいと思う。

和食のユネスコ世界遺産の委員に就任している。和食が世界で認められるなら、外国の農産物で作るといえるのは違和感がありすぎる。和食は、日本人の食パターンの原点。日本で採れる材料から作るのがほんものの和食である。

平成**25**年3月に、全国の新聞に厚生労働省発表の全国都道府県別平均寿命ランキングの記事が出た。トップは男女共に長野県。驚いたのは沖縄県で、男性が**30**位、女性**4**位。沖縄は長寿県ではなくなった。その原因は、地元の食べ物を食べなくなったから。昭和**20**年以降、アメリカの影響を受けて、急激に肉食になり、ランチョンミート等の缶詰や牛肉をよく食べるようになった。47都道府県中、1人あたりの肉消費量が、ダントツで沖縄県。そして、一番野菜の消費が少ないのも沖縄県。特に働き盛りの男性が早く亡くなっている。沖縄は、昔から医食同源、薬食同源を受け継いできた。医食同源、薬食同源というのは良い薬、良いお医者さんを体の中に入れておけば病気にならないということ。これが沖縄の生き方だった。

このような現象は、日本全体に広がってきている。平均寿命も、もう日本は世界一ではない。医療費が世界一かかっている国。日本の健康平均寿命で計算すると、日本はもっと低くなるだろう。

日本は和食に戻ったほうがいい。それには地産地消の推進は欠かせない。

なぜ、和食を食べると元気なのかは、遺伝子を見ればわかる。日本人は2種類の遺伝

子を持っている。家族の遺伝子と民族の遺伝子。民族の遺伝子は、日本人の顔や蒙古斑だけではなく、食べ物にも影響している。日本人は70年前までは牛乳を飲んでいなかった。ラクターゼがないから乳糖不耐がおきて、お腹がゴロゴロしたりする。肉も同じで、肉ばかり食べ過ぎると、大腸がんが増える。

日本人はこれまで、主に7つの食材を食べてきた。根菜、野菜、果物、山菜、豆や大豆、海藻、そして米や麦。魚や肉がなくても、和食は成立する。女子栄養大学で出されている食品成分一覧でみると、和牛のタンパク質は17～18%、大豆は乾燥させたものに水を含ませて牛肉と同じ水分で測ると、16～17%でほとんど変わらない。

そして7つの食べ物は、全て植物。植物は繊維でできている。繊維は腸を整えてくれる。今は脳より腸と言われる。免疫の8割は腸で作られている。日本人は腸を強くすれば、長生きする民族である。

地産地消で和食を食べていた時代に、40数兆円も医療費がかかっていたらどうか。この40～50年の間に急激に生活習慣病が増え、病院に行けば自己負担は2～3割、あとは国が負担している。政治への働きかけまで発展していかないと、地産地消は難しくなる。

全国約270の市町村の小・中・高校生を対象に、「あなたは今、住んでいる町は好きか」というアンケートを「好き」「きれい」「わからない」の選択で行ったところ、8割が「わからない」、次が「きれい」、これが今の日本の現実。

好きと答えたところは、全国で40ぐらい。学校給食で地元の食べ物を子供たちに食べさせる、地元の材料の供給量が多ければ多いほど好きと答えている。

好きという答えが多かったのは南国市。学校給食の地場産率の全国平均は23%に対して、南国市は91%。高知県全体から食材を集めている。二番目は、福島県の飯舘村で、地場産率87%。今は福島第一原子力発電所の事故により、避難指示区域に指定されている。三番目は栃木県都賀町。全て学校給食の地場産率が85%以上の地域。そのような地域で育つ子供たちは、自分の住む地域が好きと答えている。

今日は、この話題を最後に提供して、話を終わりたいと思います。ありがとうございました。